

## 国語

## 注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12ページにわたって印刷しております。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にH B又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、  
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを  
それぞれ一つずつ選んで、その記号の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しきずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 玄関に美しい梅の花を飾る。

(2) 陸上選手の跳躍に拍手が起る。

(3) 物理学の進歩は社会の発展に貢献した。

(4) 少しづつ水を混ぜて紙粘土を柔らかくする。

(5) 宇宙飛行士が喝采を浴びながら迎えられる。

次の各文の——を付けたかたかな部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 高原の湖が霧にツツまれる。

(2) 熱い思いを胸にヒめて大会へ向かう。

(3) 母のキヨウリは夏みかんの名産地だ。

(4) 長距離走で前回よりも記録をチヂめる。

(5) 海外留学のためにリヨケンの発行を申請する。

次の文章を読んで、あとの各間に答えよ。

小学六年生の「ぼく（あおば）」と同級生の櫻は、アオナギと名付けたオオタカのヒナの巣立ちを、鳥の研究者で自然保護活動をしている葛城たちと共に見守っている。

「そうよ、あと少し。」と、櫻が胸の前で手を組んだ。

そのとき、アオナギがスポットライトをあびたスターのように、ゆつくりとむきを変え、ぼくと櫻のほうに顔をむけた。カーブを描いている黒いくちばしの先が、刀の切つ先のようにとがつて。白に茶色い兩だれのような縦斑模様がある分厚い胸。両足を交代に持ち上げる仕草。羽毛をふくらませた体は親鳥とほとんど変わらない。すでに威厳が備わっている。アオナギはぼくたちにはじめてその全身を見せてくれた。

真ん中に黒い点がある灰色をおびた丸い目は、鋭い光を放っている。そのアオナギと視線が合つた、と思つたその瞬間、ぼくの心はズキュンと射抜かれた。電流が体を貫いた。

アオナギと、ぼくは心の中で叫んだ。  
すると、アオナギはツイツと視線をはずした。

大きな羽ばたきが二度、三度続いたと思ったら、体がフワツと浮かんだ。アオナギは首をクイツとあげ、前を見すえた。そして決意したかのように、スイーツと木立の間を縫うように飛んでいった。気がつけば、親鳥の姿も消えていた。オオタカは森の中を飛びやすいように、ほかのタカの仲間より羽が少し短くなっていると、いつだつたかじいちゃんが教えてくれた。その羽を広げて飛びたつていった。

「巣立つたな。」と、じいちゃんの声だけが聞こえた。

本当にあつけなかつた。

森の中が、静まり返つてしまつた。

しばらくして、森の奥のほうから小鳥のさえずりが少しずつもどつてきつた。  
ぼくの隣で 柳がつぶやいた。<sup>(2)</sup>

「行つちやつたよ。」と、柳が鼻声で言う。

うんうん。うなずくだけの情けないぼくは、腕で目をぬぐつた。

「アオナギ、ぼくたちのほう、むいたよな。」

「うん。さよならつてあいさつしてくれたみたいだつた。」

柳の声がゆれていた。

横にいた柳のパパが頭から手ぬぐいをはずし、しきりに顔をぬぐつてい  
る。そして、思いつきり鼻をかんだ。

その音が合図になつたのか、集まつていたサポート隊の人たちや、葛城  
さん、そしてじいちゃんが、動きはじめた。巣のあつたアカマツの木のま  
わりを片づけはじめた。

アカマツのまわりから電気柵が取り除かれ、幹からシートがはずされた。

葛城さんは幹に手をあて「窮屈だつたな、ごめんな。」と声をかけている。  
監視カメラもさつさと木からおろされた。テントの中になつた荷物が外  
にだされ、テントがたたまれた。サポート隊の人が荷物を背負つて駐車場  
にむかつて斜面を登つていく。アカマツの根元はあつという間に最初の姿  
にもどつていつた。葛城さんが小さなほうきでまわりをはいている。ゴミ  
ひとつも残さないようにと手でゴミをつまんでいる。

「先生、この山、だいぶ回復してきましたね。」

ほつきを片手に持つたまま葛城さんが言う。

「お、そつか?」

「はい、野生動物の数がかなりふえてきてますし、鳥もずいぶんもどつ  
てきてる感じがします。ということは、木々、草、虫もかなり回復して

いるということでしょう。」

「おう、そうだつたな。テントに泊まつたとき見せてもらつたな。」

じいちゃんは、まわりを見わたし、木の幹に手をあてた。

「野生動物つて?」

ゴミ拾いを手伝つていたぼくの手が止まつた。葛城さんのそばに行く。

「あれ、あおばくんも見たじやないか? テントに泊まつただろ。あの  
とき、タヌキ、シカ、イノシシ、カモシカ、イタチなどなど、モニター  
にうつつたじやないか。」

「え、そんなことあつたつけ?」

ぼくはびっくりした声をあげた。

「どうして起こしてくれなかつたんですか?」

ぼくは葛城さんに思いつきり文句を言つた。

テントに泊まつたときのことだ。ぼくはしつかりと見張るつもりだつた。

目を皿のようにしてモニターにうつるすべての動物を記憶するつもり  
だつた。寝るつもりなんてぜんぜんなかつたのに、暗くなつてくると目  
がしょぼしょぼはじめた。ランタンに灯<sup>ひ</sup>がともるときにはもう目をあ  
けていられなくて、もうろうとしてきた。そして、寝袋の中にもそもそも  
と入つたとたん、朝までぐつり寝てしまつたのだ。

「え、あおばくんは起きてたよ。モニターに動物がうつる前に気がつい  
て、ガバッと起きあがつて、頭をぱりぱりかきながらモニターをじつと  
見てたよ。そのあと、すぐにパタンと寝袋の中にもぐりこんで寝ちゃつ  
たけどね。」

ぼくは驚いた。

「ぜんぜん覚えてない……。」

「覚えてない? あれ、変だな。あんなに熱心にモニターを見てたのに……。」

覚えてないのか。寝ぼけて起きたつていう感じはしなかつたな。動物の気配を感じて、反応してたつて、ぼくには思えたんだけど……。」

葛城さんは不思議そうにつぶやく。

「そのせいか。日曜日は眠くて、眠くて……。」

あくびばかりしていた日曜日の午後を思いだした。

「あおばくんつておもしろいな。」

葛城さんが鼻の横を指でかきながらぼくを見ている。じっと見ている。

そして、ふっと目をそらした。

アカマツの木のまわりから、ひとり、またひとりと人が去り、がらんとしてしまった。ぼくはからつぼになつた巣を見あげた。

アオナギはもう、もどつてこない。

なんだかとてもさびしい。

「もう会えないんだ……。」

しょぼくれた声でつぶやいた。

「ほら、しつかりしなよ。」

ぼくの肩を思いつきりたたいたのは柳だった。

「また会えるよ。山のどこかでさ。アオナギに会えなくともその子孫にはきつと会える。だからがつかりしないの。」

「うん。そうだな。」

ぼくは息を吸つて、大きくうなづいた。

葛城さんが大きなりュックを足元に置いて、ぼくを見ていた。葛城さんともお別れだ。

みんなここから去つていく。

葛城さんが笑顔を浮かべてぼくに話しかけた。

「あおばくん、もうすぐ夏休みだろ。どうだろ、いつしょに山に行か

ないか？」

突然の誘いだつた。

葛城さんの声が、頭の中でガランガランと鐘が鳴るように響いた。

ぼくは目を見ひらいて葛城さんを見た。ぼくの視線を受け止めて、葛城さんはやわらかくほほ笑んでいる。

「いつしょに山へ？」

「そうだよ。忙しいかい？ いやかな？ 三週間くらい山で生活するけど……。山頂を目指すつていう山じゃないけど、山を知る生活を送るんだ。」

葛城さんが言い終わる前に、ぼくは叫んでいた。

「行きます、行きます。だれがなんと言つても、ぜつたいに行きます！」

即答だつた。迷いなどぜんぜんなかつた。反応がおそい、と言われ続けてきたぼく。今までになかつたことだ。

「じいちゃん、いいでしょ？ ね、ね、いいでしょ？」

じいちゃんが笑つてゐる。行つてもいいつて笑つてゐる。山をよく知つてゐるじいちゃんがうなづいてゐる。最高だ。

「ヤツター。」

ぼくは飛びあがつた。

「じゃ、詳しいことは連絡するから。」

「はい。待つてます！」

声がはずんでいた。

笑顔の葛城さんはリュックを背負い、両手に荷物をぶらさげて、道なき道を登つていく。ぼくは両手をふり、飛びあがりながら葛城さんを見送つた。

(にしがきようこ) 「アオナギの巣立つ森では」による)

〔問1〕<sup>(1)</sup> そのアオナギと視線が合った、と思ったその瞬間、ぼくの心はズキンと射抜かれた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア アオナギの姿におののく「ぼく」の様子と威嚇するアオナギの様子と、対照的に描き分けることで表現している。

イ ヒナだった頃のアオナギの姿を思い出し感慨にふける「ぼく」の様子を、擬音語を用いて表現している。

ウ アオナギの巣立ちの瞬間を待ちわびている「ぼく」の様子を、アオナギの視点から客観的に表現している。

エ 全身を現したアオナギと視線を交わした途端に心揺さぶられた「ぼく」の様子を、たとえを用いて表現している。

〔問2〕<sup>(2)</sup> ぼくの隣で郴がつぶやいた。とあるが、この表現から読み取れる郴の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア アオナギとの別れがあっけなかつたので、別れをどのように受け止めているのか「ぼく」に聞いてみようと思っている様子。

イ アオナギが飛び立つ瞬間に自分たちのほうを向いたかどうかが気になつて、「ぼく」に確かめようとしている様子。

ウ アオナギが巣立つた後の喪失感を、巣立ちと一緒に見守つた「ぼく」と分かち合おうとしている様子。

エ アオナギとの別れに感傷的になりながらも、自分よりももつと悲しんでいる「ぼく」を精一杯励まそうとしている様子。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 葛城さんが鼻の横を指でかきながらぼくを見ている。とあるが、この表現から読み取れる葛城の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「ぼく」のテントでの行動や野生動物についての発言を振り返りながら、「ぼく」への興味を深めている様子。

イ 野生動物を見られなかつた不満を一方的に伝えてきた「ぼく」をなだめ、「ぼく」の気持ちに寄り添おうとしている様子。

ウ 「ぼく」が野生動物を観察していたと思つていたが事実ではなかつたと分かり、どうやつて励ましたらよいかと迷つている様子。

エ 野生動物を見た記憶がないという「ぼく」の話から、貴重な機会を逃して落ち込んでいいかと心配している様子。

〔問4〕<sup>(4)</sup> ぼくは息を吸つて、大きくうなづいた。とあるが、「ぼく」が

「息を吸つて、大きくうなづいた」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 榛の言葉から、アオナギとの別れを受け入れられなかつた自分を情けなく思い、郴に心配をかけたことも申し訳なく思つたから。

イ 榛の言葉を受けて、アオナギやその子孫にまた会えると自分を納得させ、アオナギとの別れの寂しさを振り払おうと思つたから。

ウ 榛の言葉を聞いて、無事に巣立つたアオナギをいつまでも気にするよりも、森で過ごす今の時間を大切にしたいと思つたから。

エ 榛の言葉から、アオナギの巣立ちを見守つた人たちとの別れが近付いているのを実感し、立派な態度で別れようと思つたから。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 葛城さんが言い終わる前に、ぼくは叫んでいた。とあるが、

このときの「ぼく」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

- ア 願つてもない誘いに戸惑いつつも山で生活する好機を逃さないよう、大声を出して自分自身を勇気付けようという気持ち。  
イ 山に誘われたことに対する感謝の思いを、アオナギの巣立ちと一緒に見守った人たちに伝えたいという気持ち。

ウ 葛城の言葉に素早く反応して意思表示することで、山で生活することを祖父に認めさせたいと思う気持ち。

エ 予想もしていなかつた葛城からの誘いを受けて、山で生活することへの喜びが湧き上がって抑えきれない気持ち。

4 次の文章を読んで、あとの各間に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「人間は賢い生き物である」。誰もがそう信じているでしょう。他の動物の賢さについて言及する時にも、人間に近いことを賢さの基準としていることが多いように思われます。たとえば、人間のように道具を使える動物や、人間の指示を理解できる動物に対して「賢い」「頭がいい」と言つていないのでしょうか。では、わたしたちは何を根拠に人間は賢いと信じているのでしょうか。（第一段）

人間の賢さを主張する際によく挙げられる例は、道具使用や道具作りなどの技術です。人間以外の動物も道具を使います。有名な例として、チンパンジーが石のハンマーを使ってナツツを割ることはよく知られています。さらに、カラスは必要に応じて、素材を加工して道具を作る能力を持つことも知られています。しかし、コンピュータや宇宙船を作り出して、大気圏外まで飛んでいく動物は人間以外には現れそうにありません。（第二段）

では、コンピュータを持つていることは人間の賢さの証明になるでしょうか。パソコンやスマートフォン、そしてAIの技術も、ずいぶんと我々の生活に身近なものになつてきました。これらは非常に高度な技術と言えるでしょう。しかし、わたしたちは必ずしもその仕組みを理解して、高度な技術を利用しているわけではありません。むしろ、ほとんど理解しないままに使つている技術の方が多いのではないか。人間の賢さの象徴として取り上げられる高度な技術は、数千年、数万年の時を経て、積み重ねられた<sup>えいぢ</sup>智の結晶であり、個人の能力をはるかに超えたものなのです。チンパンジーはスマートフォンを作ることができませんが、筆者もスマートフォンを作ることはできません。先人の恩恵

を受けています。(1)

マートフォンを持つている人間を見比べて、人間の方が賢いというの

フエアな比較ではないように思われます。(第三段)

先人たちが築き上げてきた高度な技術抜きでも、人間は他の動物よりも賢いのでしょうか。\*ヘルマンらは、ヒトの子ども、チンパンジー、オランウータンを対象に、いくつかの認知能力を比較する実験を実施しました。ご褒美がどのカップの下に隠されたかを覚えているか(記憶)、音や見た目のヒントからご褒美が隠されたカップを選べるか(因果関係の理解)、ご褒美がたくさん隠されたカップを選べるか(数量概念の理解)、棒を使ってご褒美を引き寄せることができるか(道具使用)、初見では難しそうな方法でも実験者のやり方をまねしてご褒美を手に入れられるか(模倣)、など様々なテストが実施されました。人間が特別賢い動物ならば、どのテストでもチンパンジーやオランウータンよりも優れた結果を示しそうです。しかし、結果を見てみると、ほとんどのテストにおいて、ヒトの子ども、チンパンジー、オランウータンの成績に大きな違いは見られませんでした。ただし、一部のテストだけには違いが見られました。ヒトの子どもは他者を模倣する能力に関しては、他の二種よりも格段に高い成績を示したのです。(第四段)

これが、現代に見られる高度な技術を支える鍵なのです。(第五段)

先程も述べたように、現代社会に見られる多くの技術は、何もないところから急に生まれたわけではなく、長い年月をかけて徐々に発展を積み重ねてきたものです。たとえば、コンピュータ(計算機)もはじめから現在のような機械だったわけではありません。紀元前には、棒に珠を通じて木枠をはめたもの——日本人には馴染みのあるそろばんのような計算器具——が使われていたようです。その後、複雑な計算をもつと簡単に行える計算尺や機械式の手回し計算機など様々な形態を経て、少しずつ発展を遂げてきました。世代を超えて伝達されていく過程で、時々生じる改良を少しずつ積み重ね、やがて単独個人では到達できないほど高度で複雑な文化が生じる現象は、累積的文化進化と呼ばれています。ここでの「文化」とは、模倣や教育などによって社会的に伝達される情報全般を指します。社会的に伝達される情報であれば、信条、傾向、規範、嗜好などもすべて文化と言えます。(第六段)

文化を累積的に進化させるためには、文化を改良することと、改良された文化を社会的学習によって次世代に伝達することの二つのステップを繰り返すことが必要になります。ある世代で大きな技術革新が達成されても、それを次世代に忠実に伝達することができなければ、世代を超えた技術の発展は不可能でしょう。過去に発明されたことを知らないままに、何度も同じ技術を一から作り直してしまいかもしれません。これを防ぐためには、高度な技術の細部まで忠実に伝達する必要があります。(第七段)

\*ワシレフスキイは、忠実度の異なる様々な社会的学習が累積的文化進化に与える効果を調べる実験を行いました。この実験の参加者は、木製

力か」と侮つてはいけません。(2)社会的学習によつて他者から学ぶこと

のスタンド、粘土、紐を使って、できるだけ重いものを運べる容器を作れるという課題に取り組みました。実験では、一人目の参加者は自力で試行錯誤しながら容器を作りましたが、二人目以降の参加者は、前の参加者から社会的学習によって情報を得たうえで課題に取り組むことができました。この実験では、社会的学習で得られる情報が異なる三つの条件と、社会的学習を行わない条件が設けられました。完成品観察条件の二人目の参加者は、前の参加者が作った容器を観察したうえで課題に取り組むことができました。そうやって二人目の参加者が作った容器は、今度は三人目の参加者によって観察されました。観察と製作の繰り返しは最も長で十人目まで行われました。この実験デザインによって、師匠の技術を観察学習してから、自分でも技術を研鑽し、その技術がまた次世代に伝わるという「一子相伝」<sup>（いっしょでん）</sup>技術継承が再現されていました。完成品観察条件以外にも、社会的学習が可能な条件が実験されました。行動観察条件の参加者は、前世代の参加者の完成品を見られない代わりに、容器を作っている途中の行動を観察することができました。さらに、行動&完成品観察条件の参加者は、前世代の参加者の製作途中の行動と完成品の両方を観察することができました。比較のために、社会的学習はなしで、十人の参加者がそれぞれ一人で容器を作る統制条件も設けられました。（第八段）

それでは、実験の結果を紹介していきましょう。より大きな重量に耐えうる容器を作れたほど、課題の成績が高いと見なされました。まず統制条件では、参加者間の成績に、はつきりとした違いは見られませんでした。みんなバラバラに作業をしていたので、これは当然の結果です。完成品観察条件でも、はつきりとした差は見られませんでした。しかし、

行動観察条件と行動&完成品観察条件では違った結果が得られました。参加者の世代交代が進むほどに、成績が徐々に改善されていったのです。つまり、容器を作る技術の累積的文化進化が示されたのです。完成品だけを観察した参加者は、目指すべき形状がわかつたとしても、前世代の製作技術ではわからなかつたため、さらなる改良が難しかつたのです。それに対して、作業工程まで観察することができた行動観察条件と行動&完成品観察条件では、前世代の製作技術を忠実にまねることができます。（第九段）

（3）実験条件を異なる社会として考えてみると、技術の細部まで伝達する社会とそうでない社会では、前者だけが長い年月を経て非常に優れた技術まで到達できることが示唆されたのです。忠実な伝達を行うことで累積的文化進化が促進されるということは、他にもいくつかの研究から支持されています。（第十段）

（中田星矢「文化のバトンを受け継ぐコミュニケーション」）

（一部改変）による

〔注〕 ヘルマン——ドイツの靈長類学者。

嗜好（しこう）——人それぞれの、飲み物や食べ物等の好み。

ワシレフスキ——アメリカの進化人類学者。

いっしょでん——学術・技芸などを一人だけに伝えて他に漏らさないこと。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 石のハンマーを持つているチンパンジーとスマートフォンを持つている人間を見比べて、人間の方が賢いというのはフェアな比較ではないように思われます。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア チンパンジーと人間の賢さは、道具の使い方ではなく高度な仕組みを理解できるかどうかで比較するべきであると考えているから。

イ 石のハンマーとスマートフォンだけで賢さを判断するのは不十分であり、他の道具も加えて比較するべきであると考えているから。

ウ チンパンジーと人間の賢さは、持つている道具を基準に判断するのではなく個々の能力で比較するべきであると考えているから。

エ チンパンジーも筆者もスマートフォンの作り方がわからぬいため、作り方がわかる道具で賢さを比較するべきであると考えているから。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 社会的学習によつて他者から学ぶことこそが、現代に見られる高度な技術を支える鍵なのです。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 因果関係や数量概念を理解する能力が、高度な技術を継承したり伝達したりするために必要不可欠だということ。

イ 他者が製作した道具を使いこなす能力が、同じ道具を一から忠実に作り直すために必要不可欠だということ。

ウ 道具の使い方を他者に伝達する能力が、さらに便利な道具を開発し続けるために必要不可欠だということ。

エ 他者の行動や様子を捉えて模倣する能力が、世代を超えて技術を発展させていくために必要不可欠だということ。

〔問3〕 この文章の構成における第七段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べた内容を整理した上で、さらに説明を付け加え、この後に紹介する具体例へと論をつなげてはいる。

イ それまでに述べた内容に対して、根拠となる事例を付け加え、この後に述べる主張の前提を明らかにしている。

ウ それまでに述べた内容に対して、対照的な意見を付け加え、この後に続く話題への転換を図つてはいる。

エ それまでに述べた内容をまとめた上で、筆者の体験を付け加え、この後に引き継がれる自説の妥当性を強調してはいる。

〔問4〕<sup>(3)</sup> 実験条件を異なる社会として考えてみると、技術の細部まで伝達する社会とそうでない社会では、前者だけが長い年月を経て非常に優れた技術まで到達できることが示唆されたのです。とあるが、「前者だけが長い年月を経て非常に優れた技術まで到達できることが示唆された」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 作業工程と完成品の両方を観察した参加者だけが技術を応用することができ、技術革新を達成すると示されたから。

イ 作業工程を観察してきた参加者だけが前世代の製作技術を学ぶことができ、技術の改良と継承が続くと示されたから。

ウ 自力で試行錯誤した参加者だけが技術を磨き続けることができ、自分自身の力で高い技術を得られると示されたから。

エ 前世代の完成品を観察した参加者だけが同様の技術を再現することができ、技術の継承が行われると示されたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「文化を受け継ぎ発展させること」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

河合 なるほど。

イ 池田 俊成は『源氏物語』を読まない歌よみは遺恨だという。——遺恨

といつても恨みを残すという意味ではなくて遺憾という意味ですね。だから定家は若いころから当然『源氏』や『古今集』を読んでいた。しかし『古今集』の前に当然『万葉集』があるわけですから、『万葉集』をよく読み解かないと、古い時代の歌ごころはわからない。俊成も『古来風体抄』のなかで『万葉集』の歌から講義を始めています。萩谷朴さんがさかんにいわれていることですが、『松浦宮物語』を書くことによつ

て定家は万葉風の古い時代の物語をイメージしたのではないか、そうすると当然、万葉調の歌を詠まさるをえないわけで、万葉調に詠んでいいたらこういう歌になりますよと、そういうテクニックを『松浦宮』を書くことで習熟しようとしたのではないかと、つまり万葉稽古だと萩谷さんはおっしゃる。これはとてもおもしろい見方だとは思います。えよ。(\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

河合

歌の場合は独立して歌としてある場合と、日常会話というか、

その場面に応じて詠まれる歌がありますから、『源氏』を読むとどういう場面でどういう歌を詠むべきかということがよくわかるわけですね。しかも非常に細かくわかるんです。詠む人の立場、身分、それ

として勉強するわけです。それから定家の父親の俊成は、歌よみは『源氏物語』を読めとさかんに言つてはいる。『源氏物語』はもちろん物語

ですが、歌が約八百首もある。どういうときにどういう歌を詠めば評価されるか、またいかなる行事のときにどのような型にはまつた歌を詠むべきかとかということは、歌の集を読んでいたのではわからないわけです。歌を詠む前後の人びとの心の動きとか状況を勉強するには『源氏物語』は格好の教材なんです。

葉集や詞花集より多くて、かなりのものなんですね。

河合 それはそうですね。

池田 ですから『源氏』を長い説明のついた歌の集として読めば、歌よみの教材として抜群です。

河合 紫式部はもちろんそれを意識して歌をつくっているわけですね。だから笑われるような歌もわざと詠んでいる。そしてほんとうの歌として通用する歌もつくっているわけですね。

池田 そういうことです。

(1) 河合 『古今集』を編集するときはどうしたんでしょうか、ともかくいい歌を選んだのでしょうか。

池田 『古今集』にしても勅撰集の場合には、まず撰者が選ばれて、撰者が歌を持ち寄つて、いい歌、悪い歌をふるい分けていく。それから部立といつて、どういうジャンルの歌をどれくらい載せるか、構成なんかも考えていくのですが、定家の時代の勅撰集はなかなか一回で成立しなくて、『新古今』などは切り継ぎ、つまり再編集の連続だといわれるくらいです。とくに後鳥羽院という人はご自身が歌よみとしてすぐれているし、口うるさいし、武芸もできるし、すべてできすぎるくらいの人だつたんですね。ですから撰者を任命していろいろ気にいらないので、あれを入れる、これは入れるなど何回もやりかえたようです。だから隠岐へ流されても隠岐でもやつていたようなのです。

勅撰集といえば、なにしろ天皇や上皇の名において編纂するわけですから、そこに自分の歌が一首でも入るとそれは極めて名誉なことで、何首も入つたり、いわんや撰者に任命されるというのはたい

へんな名誉です。定家は『新古今』の撰者の一人ですが、『新古今』の次の『新勅撰集』の場合は撰者は定家ひとりですから、これはたいへんなことです。

河合 『松浦宮』に出てくる歌で、やはり定家らしいという歌もありますか。前半の歌はあまりありませんが、後半にすこしあります。

河合 それはまたおもしろいですね。だから物語を書くことによって自己も楽しんだのでしょうか。

(河合隼雄、池田利夫「松浦宮物語と藤原定家」による)

Bさて、俊成は『源氏物語』について、きわめて印象的な言葉を残していいた。それは『六百番歌合』にある以下の言葉である。

冬上十三番 枯野 左勝 女房（藤原良経）  
見し秋を何に残さん草の原ひとつに変る野辺のけしきに

右 隆信

霜枯の野辺のあはれを見ぬ人や秋の色には心とめけむ

右方申云、「草の原」聞きよからず。左方申云、右歌古めかし。  
判云、左、「何に残さん草の原」といへる、艶にこそ待めれ。右、  
方人、「草の原」難申之条、尤うたたある事にや。紫式部、歌詠  
みの程よりも物書く筆は殊勝なり。其上、花の宴の巻は、殊に艶なる  
物也。源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也。右、心詞、悪しくは見えざ  
るにや。但、常の体なるべし。左歌、宜。勝と申べし。

「判云」以下が俊成の言葉（判詞）である。この二つの歌は、「枯野」という題で詠まれている。どちらがよいかを判定するのが判者たる俊成の仕事となる。結論は、女房（歌合では高貴な主催者の場合身分を隠して「女房」と記されることが多い）とされる藤原良経の「見し秋を」歌の勝ちとなつた。通常、院・天皇をはじめとする高貴な人（この場合は「女房」と記される良経）は歌合では勝つことになっているから、この結果にそれほどの驚きはないが、問題は勝つた理由である。俊成は判詞で藤原良経詠の「草の原」にひどく反応しているのだ。

まず、「左の歌（藤原良経詠）」は、「何に残さん草の原」と言つてはいる、これは艶（優美）でござります」と讀めている。そして、判詞の前に「草の原聞きよからず」（「草の原」は聞きにくい、あまり聞いたことがない）とした「右方」の難陳（双方の方人がそれぞれ相手の歌を批判したり評価したりすること）に対して、「右方」の人が「草の原」を非難するのは間違つてはいる。紫式部は歌人以上に物語を書く能力が優れている。加えて、『源氏物語』「花宴」の巻はとくに優美なものである。ああ、『源氏物語』を読まない歌人は遺恨（遺憾・残念、もっと言えば駄目だくらいの意味）のことだ」と嘆くのである。

はじめてこれを読んだ人は、どうしてここで唐突に『源氏物語』が出でたのか、不思議に思つたに違ひない。種明かしをすれば、『源氏物語』「花宴」巻にこのような歌があるのだ。

女  
\*（臘月夜）

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

（前田雅之「なぜ古典を勉強するのか」による）

冬上十三番 枯野 左の勝ち 女房（藤原良経）（の歌）  
秋の間に見た美しい景色を何に残したらよいだろうか。秋の間多くの花が咲いた草の原も枯れて見渡す限り同じ景色に変わつてしまつてゐる。

右 隆信（の歌）

霜枯れの野辺の荒れ果てた様子に目を留めない人が秋の寂しい景色には心をとめたのであらうか。

右の歌の作者（隆信）は、（良経の歌の）「草の原」は歌に使う言葉として聞きなれない（のでよくない）と申します。左の歌の作者（良経）は右の歌は古めかしい（のでよくない）と申します。

判定役（俊成）としていうと、左の歌の「何に残さん草の原」というのが優艶でござります。右の歌の作者が「草の原」を非難したのは非常に不満です。紫式部は歌を詠むより物語を書く力が格段に優れています。その上、（源氏物語の）花の宴の巻は、特に優美な話です。源氏物語を見ていない歌詠みはとても残念です。右の歌の内容と言葉は悪くありません。とはいうものの、ありふれた平凡な歌です。左の歌の方が素晴らしい、勝ちというべきです。

〔注〕 松浦宮——平安時代末期から鎌倉時代の歌人である藤原定家による物語『松浦宮物語』のこと。

萩谷朴（はぎたにぼく）——平安時代中期の歌人。  
藤原良経（とうばらのよしつね）——国文学者。  
臘月夜（おぼろづきよ）——『源氏物語』の登場人物。女性。

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ  
——つらい身の私が、このまま消えてしまつたら、名を知らないからといって、あなたは草の原を分けてでも私を尋ねようとはなさらないでしようか。

〔問1〕 Aの中の――を付けたA～Eの「ない」のうち、他と意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕<sup>(1)</sup> 河合さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 池田さんの『源氏』における歌の説明に疑問をもち『古今集』での歌の選び方を尋ねることで、話題を整理している。

イ 『源氏』の歌の作り方について池田さんと共に理解を得られたことで、対談の内容を深めるために話題を『古今集』に転換している。ウ 歌を詠むまでの『源氏』と『古今集』の重要性について池田さんと共に理解を得たことで、自説を述べるきっかけを作っている。

エ 池田さんの『源氏』の説明に疑問をもち『古今集』との共通点について質問することで、次の発言を促している。

〔問3〕<sup>(2)</sup> むしろ意識的に定家らしくなくつくつているように見えますね。とあるが、ここでいう「意識的に定家らしくなくつくつている」を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどちらか。

ア 定家は『万葉集』の時代を想像して書いた『松浦宮』の作中において、自身の作風とは異なる万葉風の歌も詠んだということ。

イ 定家は『万葉集』を批判するために書いた『松浦宮』の作中において、万葉風とは違う作風の歌を詠んだということ。

ウ 定家は『万葉集』のよさに改めて気付き、『松浦宮』の作中で徐々に万葉風の歌を増やしていくこと。

エ 定家は『万葉集』の歌ごころが想像できるようになつたからこそ、『松浦宮』の作中で万葉風とは異なる歌のみを詠んだということ。

〔問4〕<sup>(3)</sup> 非難するのはとあるが、Bの原文において「非難するのは」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 聞きよからず  
イ 艷にこそ

ウ 難申之条  
エ 悪しくは見えざるにや

〔問5〕 A及びBでは共通して『源氏物語』を歌人の必読の物語だとする俊成の考えが示されているが、A及びBのそれまで述べられた、歌人にとっての『源氏物語』の価値を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア Aでは『古今集』を読み解くのに適している作品だと述べられており、Bでは歌合の判定の根拠になるほど優美な歌が含まれる作品だと述べられている。

イ Aでは歌が詠まれる状況や心の動きを理解できる作品だと述べられており、Bでは歌を含む物語によって優美な世界を表現できる人物が書いた作品だと述べられている。

ウ Aでは作中の歌を通じて『万葉集』の時代の人の心を理解できる作品だと述べられており、Bでは優美な歌合の様子が現代の私たちにもわかる作品だと述べられている。

エ Aでは歌の技法を理解するのに適している作品だと述べられており、Bでは歌集としての評価以上に優美な物語として高く評価されている作品だと述べられている。